

歴史の中の女医

兵庫教育大学 教育臨床 岩井圭司 (61年卒, 精神科)

私は1997年度から、神戸大学の六甲キャンパスで医学部1年生向けに開講されている「自然科学概論」の講義を担当しています。科目名は「自然科学……」ですが、実際の講義内容は医学方法論と医学史をメインにすえ、かなり自由にやらせてもらっています。その中で、女医の歴史を毎年とりあげているのですが、本稿ではその一部をご紹介します。どうぞと思いません。

ジャズの巨匠、G・ガーシュウィンに『ポギーとベス』(1935年初演)という、1920年代アメリカの黒人スラムを舞台にしたミュージカルがあります。今日では世界中のオペラハウスで上演され、名作「オペラ」としての地位を確立している作品であり、「差別にあえいでいた当時の黒人の生活を活写している」と評価されるかと思えば、「黒人に対する差別意識にあふれた度し難い作品である」と非難される作品です。

このオペラには二人の黒人弁護士が登場します(一人は成金趣味の悪徳弁護士、もう一人は質素な正義漢)。このことは、1920年代のアメリカでは——遅くとも1935年の時点では——、おそらく少数であったとはいえ正規の弁護士資格を有する黒人が社会的に認知されていたということを示しています。同じ頃、医療界でも黒人医師の進出が始まっていました。

ところがこの時期、全医師数に占める女医の割合は、アメリカでは“底値”を記録しています。18世紀以降きわめて緩徐に増加していた女医数は20世紀の初頭より減少に転じ、1930年代に再増をみるまで減少しつづけていたのです。W・オスラーを中心とする医学改革運動の真っ只中でのことです。

歴史家やフェミニストの中には、この1920年代の医師数統計に基づいて、「アメリカでは、近代的医師資格への女性の参入が認められたのは、黒人男性よりも遅かった」と言う人がいます。そう言って決して間違いではないのですが、むしろ私は、医学医療の近代化の初期段階において、却って女性が排除されたことをこそ問題にしたいと思います。

女医減少の一因は、医学改革運動そのものによりま

した。ジョンズ・ホプキンス大学が1892年に創設され、1910年には有名な「フレクスナー報告」が出され、医学の科学化、医学教育のシステム化、医療の社会制度化、医師資格の厳密化、医師ギルドの学会化(これ以降今日に至るまでアメリカのAMAは、わが国の日本医師会と医学会総会を完全に一本化したような組織です)などが進められます。そしてその結果、医師の社会的地位が著しく上昇すると同時に、新卒の女性医師数は激減しました。女子医学校の多くが、認可を取り消されてしまったからです。当時の女子医学校の多くは、残念なことに十分な設備・スタッフを備えていないところが多かったようです。

実は、似たような歴史はわが国にもあります。医術開業試験の“予備校”として知られた済生学舎は1900年11月になって女子学生の新入学を拒絶しました。1904年に予定された開業試験の廃止を前に、正規の医学校に昇格することをにらんでのことだったといわれています。1904年には私立「日本医学校」が男女共学制で開校されましたが、1911年には医学専門学校昇格準備のため、女子の入学を拒絶しています。(これらの動きに刺激されて、吉岡彌生が私塾「東京女医学校」を創設(1900年)したことはよく知られています。)

ここで二つの疑問が生じます。済生学舎や日本医学校はどうして“昇格”のために女子学生を切り捨てねばならなかったのでしょうか。また、吉岡彌生はどうして女医学校を(共学校ではなく)創らねばならなかったのでしょうか。

どうやら当時の医学校にとっては、女子学生の存在自体が“ステイグマ”であったようです。女子学生を在籍させているというだけで、その学校の入学要件が“低い”という証ととらえられかねなかったのでしょうか。確かに当時、官立医育機関(帝大医学部、医大、医専)で女子の入学を認めているところはありませんでした。

そして、仮に入学を許されても、女子学生たちは男子学生からの好奇の眼差しに堪えねばなりません。た。「女だてらに生意気に……」という視線です。そ

のような圧迫から女医志望者を解放するためには、やはり女子医学校が必要だったのではないのでしょうか。

再びアメリカに目を転じるならば、ハリオット・ハント（1805-75）は、ハーヴァード大医学部への入学を教授会に承認されながら、学生たちに妨害されています。そのときの学生の反対決議を引用してみます。

「真のデリカシーを持つ女性ならば、男性の面前で、医学生が取り組むような問題を聞こうなどとはしないであろう。（中略）女性の特徴を投げ捨て、講義室に男性とともに現れてその憤みを犠牲にするような女性との同席を、われわれは断固拒否する」

もう少し時代を遡るならば、17～18世紀のフランスやイギリスでときに宗教的権威にまでたよって（魔女狩に訴えまでして）女性医療者を排斥しようとした急先鋒は、当時民衆のための医療を実践しながら“二級医師”の地位に甘んじざるを得なかった「床屋外科医」でした。

つまり、歴史的にみて女医を最も強力に排除しよう

としてきた勢力は、“二級医育者”、医学生、そして“二級医師”たちであったわけです。

さて、今日のわたしたち男性医師は、ハントの時代のハーヴァードの医学生や17世紀の床屋外科医からどれだけの距離を隔てたものであるのでしょうか。再考と内省が求められているように思います。

【参考文献】

C・ジョエル（内村留美子訳）：『医の神（アスクレピオス）の娘たち----語られなかった女医の系譜』、メディカ出版。

B・エーレンライク、D・イングリッシュ（長瀬久子訳）：『魔女・産婆・看護婦』、法政大学出版会。

A・ライオンズ、R・ペトルセリ（小川鼎三監訳）：「医学界の女性」．『図説医学の歴史』、学研、所収（pp.564-575）。

日本女医会ホームページ

URL：<http://www.jade.dti.ne.jp/~jmwa/intro.html>